目　次

序　章　『源氏物語』の「語りと主題」の論のために……3
第一章　『源氏物語』の「語り」の論……7
第一節　『源氏物語』の「語り手」と「語られた物語」……7
一　「女」の「語り手」になる作品……7
二　『源氏物語』の「語り手」が「女」であるとする根拠……10
三　意識化された「女」の「語り手」の立場……12
四　「語り」研究の意義……15
五　「語り」研究の見通し――「帚木」三帖を例に――……18
六　「語られた物語」の測定――「玉鬘」十帖の場合――……21
七　古女房の「語り」の効果……29
第二節　『源氏物語』の「語り」文の分析……34
一　「地の文」の下二段補助動詞「給ふ」の唯一例……34
二　「おぼえたまふ」小考……40

三　「語り手」の自在性……43
四　いわゆる「地の文」の「はべり」――『源氏物語』の場合――……46
五　いわゆる「地の文」の「はべり」――『紫式部日記』の場合――……49
六　いわゆる「地の文」の「はべり」――その他の作品群の例――……51
七　いわゆる「地の文」の係り助詞「なむ」について……52
八　係り助詞「なむ」の研究の現在……53
九　『源氏物語』の「地の文」の係り助詞「なむ」
――仮想される「地の文」の「はべり」・下二段補助動詞「給ふ」――……56
十　いわゆる「地の文」に「なむ」が頻出する理由……57
十一　「地の文」と「草子地」……60
十二　「語るように」「書かれた」和文……63
十三　『源氏物語』研究の「語り・語り手・語られた物語」の視点の意義……66
第二章　『源氏物語』の「作り方」「作られ方」……74
第一節　「桐壺」巻の分析……74
一　問題の所在……74
二　「桐壺」巻の解らなさ……78
三　「桐壺」巻の「異事（あやしごと）」と「常事（つねごと）」……82

四　桐壺帝の御時の聖代幻想……84
五　御局は桐壺なり……88
六　源氏になしたてまつる……91
七　葵上について……95
八　「桐壺」巻の幻想喚起装置……97
付　節　『源氏物語』の神秘化批判と神秘化の間
――舟橋聖一『好きな女の胸飾り』を例に――……103
第二節　「帚木」三帖の「語り手」――書かれなかった最初の藤壺宮事件――……121
一　問題の所在……121
二　六条御息所との逢瀬の描かれ方……124
三　藤壺宮との逢瀬の描かれ方……129
四　「帚木」三帖の語られ方……133
五　藤壺宮との最初の逢瀬……137
六　「帚木」三帖序跋を除く「語り手」……143
七　〝醜〟と〝美〟の間……147
第三節　「夕顔」巻の二三の問題……153

一　「夕顔」巻と漢詩文影響論の現在……153
二　「心あてに」の歌をめぐる新説とその波紋……158
三　『源氏物語』を読むという「遊び」……160
四　「心あてに」の歌注解の現在……166
五　随身について……170
第四節　紫の君の頃の物語……180
一　『源氏物語』作中人物論の可能性……180
二　「若紫」巻のダイナミズムを読む……184
第五節　紫の君の結婚……190
一　『源氏物語』のエロティシズム……190
二　「身にしむ」の語……192
三　エロティシズムの性差……195
四　紫の君の結婚……199
第六節　「葵」「賢木」両巻の女君達——人物造型のダイナミズム——……204
一　問題の所在……204
二　『源氏物語』の「知る人」「知らぬ人」……204

三　「葵」巻冒頭の藤壺宮の動向記事……207
四　「葵」巻の「語り手」の姿勢……211
五　紫上のために……213
付　節　「葵」巻の六条御息所の歌の引き歌……219
第七節　「賢木」巻の雲林院籠りの贈答歌をめぐる問題
——紫の君は光源氏と藤壺宮の秘密を知っていたか——……226
一　紫上の嫉妬……226
二　紫上は光源氏・藤壺宮の秘密を知っていたか……232
三　「賢木」巻の雲林院籠りの贈答歌……237
四　物語往還……243
第八節　明石の別れ——回想の効用——……246
一　はじめに……246
二　明石の別れ……246
三　「明石の別れ」の回想　その1……250
四　「明石の別れ」の回想　その2・その3……252
五　「明石の別れ」の回想　その4……253

六　「回想」の効用……257
付　節　「松風」巻と兼明親王……260
第九節　「朝顔」「少女」両巻の桐壺院姉妹――老女宮の役割をめぐって――……265
一　問題の所在……265
二　女五宮の登場……267
三　遠ざかる桐壺院御代……270
四　「薄雲」「朝顔」巻の「まかり申し」の対照……274
五　月の夜雪景色を見ての語らい……278
六　大宮の活躍……280
七　「朝顔」「少女」両巻の桐壺院姉妹の役割……282
第十節　「玉鬘」十帖の読み方――そのルールを求めて――……285
一　問題の所在……285
二　六条院造営と玉鬘の登場……286
三　玉鬘の位置づけ――六条院入りにあたって――……291
四　玉鬘の悲しみ――六条院世界からの退場――……294
五　「玉鬘」十帖の読み方のルール……298

第十一節　蛍兵部卿宮のこと……304
一　「玉鬘」十帖と「蛍」巻……304
二　「蛍」巻の位置と構造……306
三　『源氏物語』の兵部卿宮……307
四　玉鬘の懸想人蛍兵部卿宮……309
五　兵部卿宮、蛍火に玉鬘を見る……312
六　物語文学の世界――その非現実の現実――……313
七　蛍兵部卿宮その後……315
第三章　光源氏晩年の物語の分析……317
第一節　「若菜上」「若菜下」両巻の時間的考察……317
一　問題の所在……317
二　巻名「若菜」……319
三　二つの若菜の儀……324
四　「若菜」上下巻の照応とずれ……330
五　老いの自覚……337
六　朱雀院五十賀宴の挙行……340

第二節　柏木死後の物語――夕霧の役割を通して――……346
一　夕霧の役割（1）……346
二　夕霧の役割（2）……352
三　「鈴虫」巻の位置……357
四　「夕霧」巻の位置……359
五　遠ざかる柏木の死……362
六　柏木死後の物語の主題……369
第四章　宇治十帖主題論……374
第一節　光源氏没後の物語の構造……374
一　正編から続編へ――「残してゆく者」と「残された者」――……374
二　続編の主人公薫……381
三　「紅梅」巻の位置……385
四　蔵人少将の恋――「竹河」巻について――……388
五　光源氏没後の物語の主題……392
第二節　薫と大君……397
一　薫の魅力……397

二　薫の求婚……401
三　大君の魅力……404
四　薫の恋……409
五　隔てなき語らい……411
六　契り得ぬ仲……414
七　大君思慕の物語の意味……416
八　〝愛〟と〝死〟と……421
第三節　宇治の八宮……429
一　八宮の印象……429
二　八宮の素描……430
三　薫と八宮……432
四　八宮の姫君……433
五　八宮の女性観……436
六　大君の悲しみ……439
七　もう一つの八宮像……441
第四節　薫と中君――密通回避をめぐって――……446

一　大君死後……446
二　「宿木」巻巻頭と「若菜上」巻との呼応……449
三　女二宮の降嫁……452
四　六君の扱い……455
五　薫と中君の密通回避……458
六　匂宮の嫉妬……467
七　宇治の御堂造営……469
八　密通回避の物語の意味……471
第五節　薫と浮舟――宇治十帖主題論――……474
一　手習の君……474
二　絆を求めて――浮舟の場合――……477
三　浮舟の母恋……482
四　絆を求めて――薫の場合――……484
五　薫像の深層……489
六　浮舟の役割……492
七　「蜻蛉」巻の法華八講……496

八　法興院の法華八講……499
九　六条院家と薫……503
十　宇治十帖の主題……508
第六節　横川僧都と小野の人々――宇治十帖主題論拾遺――……515
一　小野の山里……515
二　小野の位置……517
三　北山の尼君と小野の尼君ひき較べ……520
四　〈鏡〉としての浮舟……521
五　映し出された小野の人々……525
六　結界の外、小野の地の象徴性……527
第五章　「夢の浮橋」考……530
一　巻の命名……530
二　「夢の浮橋」巻名考史……531
三　「夢のわたりの浮橋」の用例……534
四　「夢の浮橋」の用例……538
五　「夢のわたりの浮橋」「夢の浮橋」と「夢」……541

六　益田勝実氏の「『夢の浮橋』のイメージ」の検討……543
七　「浮橋」の語の内包するもの……549
八　「橋」と仏教……554
九　「夢の浮橋」と「法の師」……559
十　「夢の浮橋」考……565
終章　『源氏物語』主題論の試み
——顕在化する「語り手」の言葉を起点として——……572
一　『源氏物語』の「語り」研究の現在……572
二　いわゆる「地の文」の下二段補助動詞「給ふ」の唯一例……574
三　いわゆる「地の文」に顕われる「語り手」の主情表現……577
四　いわゆる「地の文」の「はべり」と係り助詞「なむ」……579
五　『源氏物語』の「語り」研究と主題論……581
初出論文一覧……586
あとがき……591
人名・古典籍索引……593

源氏物語の語りと主題

序章　『源氏物語』の「語りと主題」の論のために

『源氏物語』を読むということは〝遊び〟にほかならない。しかしながら、ホイジンガがその著『ホモ・ルーデンス』（遊ぶ人）でいみじくも指摘しているように、〝遊び〟にはそこに必ずそれ自身のためのルールが存在する（高橋英夫訳中公文庫でいう「遊びの規則」）。『源氏物語』を読むという〝遊び〟にあって、そのルールを見定めることは、実に〝学問的〟な営為にほかならない。

物語文学作品はその「物語」という語が示すように、書かれた作品にもかかわらず、まさしく「語り」の上に成り立つ体をとる文藝である。こうした作品を読むにあたっては、まずその「語り」の仕組みを理解することが必須である。すなわちその「語り」のルールをわきまえることに他ならない。

しかしながら、そのルールは実は自明ではない。ましてや古代の物語にあっては一層不分明なことばかりである。現代に生きる我々にあっては、物語を読むという〝遊び〟はまずそのルールを探し求めることから始まるのだ。

本稿『源氏物語の語りと主題』はまず『源氏物語』の「語り」の実際を解明するところから始まる。

『源氏物語』は小説とは違って「物語」である。

『源氏物語』は古女房の「語り」の体をとっている。